



# さいたま市立宮原小学校 学校だより



令和8年2月27日 第11号

## 学校教育目標

・たがいに努める子(やる気)・たがいにきたえる子(元気)・たがいに手をとる子(勇気)

## ほめる part2

～子どもたちの心豊かで健やかな成長のために～

井上 雅史

今年度の登校日も残すところ 18日となりました。6年生は 16日後に卒業式を迎えます。令和7年度の1年間、保護者・地域の皆様には、本校の教育活動に対し深いご理解と温かいご協力を賜り、誠にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

また、昨年末に実施いたしました学校評価アンケートでは、お忙しい中ご回答いただき誠にありがとうございました。多く寄せられた肯定的なご意見からは、教育活動をさらに推進していくエネルギーをいただきました。併せて、課題としてご指摘いただいた点につきましては、真摯に受け止め、校内でしっかりと協議し、今後の学校運営の改善に活かしてまいります。(アンケート結果につきましては、改めて別紙にてご報告いたします。)

さて、令和6年の夏休み明けの学校だよりで「褒める」ことについて、「結果ではなく過程を認めて褒めることが子どもの成長につながる」という内容をお伝えしました。それから時間がだいぶ経ってしまいましたが、一年のまとめとなる今月号では、子どもたちの新たなステージに向け、今後も子どもたちが心豊かで健やかな成長するために「褒める」と「叱る」という視点から、大人ができる関わりを考えてみたいと思います。

褒められることは、大人でも子どもでも嬉しいものです。しかし、上下関係を前提とした“上から目線”の褒め言葉には注意が必要だと言われています。

例えば、親の言いつけを守った子どもに「偉かったね」と褒めたとします。よくあることですし、当たり前前の褒め方だと思います。しかし、これは上位の立場の親が下位の立場の子どもに向けた褒め方で、状況によっては子どもが喜ばない場合があります。褒められた内容よりも、上下関係の圧力を感じてしまうようです。そして、常にこのような上位から下位に向けた褒め方が続くと、親子関係が悪化する危険性も指摘されています。

そうならないためには「〇〇をしてくれてありがとう」「〇〇をしてくれて助かったよ」等の大人と子どもがフラットな関係での言葉かけが大切だそうです。つまり、大人(自分)が言われてうれしい言葉かけをすることです。そのような言葉は、子どもにとっても心に残るうれしい言葉になります。

一方、叱るのは、子どもの行為がよくないことを伝えるためです。大人が叱っている姿や言葉で、ことのよし悪しを子どもに伝えることとなります。子どもは叱られた経験で、善悪の知識を身に付けることができます。

しかし、小学生が叱られた際にどう反応しているかを調査した研究によると、大人のきつい叱り言葉は、子どもの反省の気持ちを弱めることが分かっています。また、信頼関係が不十分な大人に叱られた場合、小学生は「無視して憎む」「言うことは聞くが、反省しない」等といった反応が多く見られることも分かっています。

そして、叱り方が適切でなかったり、叱った後にフォローがなかったりすると、叱った大人と叱られた子どもの関係は更に悪化し、どんなに正しい言葉であっても、子どもは素直に聞いて反省する気持ちをもつことができなくなっていくとします。子どもが自分で考え判断する隙を与えない大人からの命令口調の場合も同様です。

褒めるときも、叱るときも、また指示するときも、信頼関係がその基盤となります。大人側が「親だから」「教師だから」「年上だから」という理由だけで、子どもが素直に従うべきだという考えをもっている場合は、大人自身が自己を見つめて反省しなければならぬかもしれません。

小学生の子どもは、まだ保護されるべき存在です。しかし、同時にそれぞれが自分の思いをもった立派な一人の人間です。これからたくさんの経験をしながら人生を歩いていく彼らが、健やかに心豊かに成長し、自立した社会人となっていくことができるよう、我々大人も理想を追い求め、より良い関係の中で豊かな教育活動をし続けたいと思います。

～あいさつの言葉交わしていますか～「おはよう・おやすみなさい」「いってきます・いってらっしゃい」「ただいま・おかえりなさい」